同志社人物誌 76

家永豊吉
――もう一つの「太平洋の懸橋（かけはし）」

西田 毅
（大学法学部教授）

一

家永豊吉（一八六二―一九三六）は、今日では学界や言論界でまったく、忘れ去られた存在である。しかし、家永の事績を調べてゆくうちに、かれは、ひとり同志社が生んだ逸材というだけでなく、その足跡は、波乱に富む近代日本とアメリカの知的交流や文化接触史上、新渡戸稲造や朝河貫一らの業績に比せられるべき大きさをもつことが次第に判明してきた。

筆者が家永豊吉の名前を知ったのは、今から二〇余年も前のことで『蘇峰自伝』や『国民之友』に掲載された評論、それに、熊本洋学校関係の史料閲覧を通じてであった。また、先年、京都のある会合でたまたまハワイ大学のジョージ・アキタ氏と会ったとき、かれのような外国人研究者が、「マイナー」な家永に興味をもっていることを知って驚いたり、慶應の福沢研究センターで、家永の慶應義塾の専任教員時代のことを調査する過程で私自身の関心が徐々に深まっていった。そのような折にちょうど昨年（一九九五年）の秋、早稲田大学の内田満教授が、「近代日本における同志社と早稲田の知の交流―政治学の場合」と題する講演で、家永が早稲田において、当時最先端をゆくアメリカ政治学を積極的に紹介したことなどにふれられた。内田教授の同志社法学会の講演については、筆者は、学内広報誌や同志社タイムスに紹介しておいた。従来の安部磯雄や浮田和民研究に加えて、早稲田では、さらに、アメリカ政治学への視座という観点から浮田と並んで家永に対する関心が高まっていることを知って新鮮な驚きを禁じ得なかった。そして、このたび太田雅夫編監訳の『家永豊吉と明治憲政史論』（一九九六年四月）

家永豊吉略歴

一八六二（文久二）年八月、福岡県柳川に生まれる。父は元大津県知事、元老院議官の辻維岳。一八七四（明治七）年、熊本洋学校に入学、花岡山における「奉教趣意書」に署名、熊本バンドの一員となる。

一八七六（明治九）年九月、同志社に入学。一八七九（明治一二）年退学、米国オベリン大学に自費留学。さらに、ジョンズ・ホプキンス大学に進み、PhDを取得。

一八九〇（明治二三）年帰国、東京専門学校講師になり、一八九三（明治二六）年から一九〇〇（明治三三）年まで慶應義塾大学文学部教授。一九〇一（明治三四）年再渡米。シカゴ大学講師として約一〇年間、ユニバーシティエキステンション運動に参加。あわせて、民間外交官として日米摩擦の解消に一役買う。晩年はニューヨーク州郊外で静かに余生を送っていたが、一九三六（昭和一一）年一二月、オニーダ湖上で事故死。享年七四。

が公刊された。

本書は二部構成から成り、第一部は家永の生涯、それは熊本洋学校、同志社時代にはじまり、オベリン大学とジョンズ・ホプキンス大学時代、そして帰国後の東京専門学校講師時代、外務省、台湾総督府時代、さらに、一九〇一（明治34）年、四〇歳で再渡米、シカゴ大学の大学普及部 University Extension 特任教授として日米友好のために大車輪の活躍をする国際人としてのアメリカ時代に至るその「数奇な生涯」が包括的に描かれている。第二部はPhD論文「日本における立憲政治の発達一八五三―一八八一年」The Constitutional Development of Japan, 1853-1881 をはじめ二篇の演説、そして、ジョンズ・ホプキンズ大学時代の新島襄あて書簡（英文）等が収められている。いずれも、現在、原本の入手がかなり困難な資料である。

家永に関する不十分な史料というハンディキャップの中で、編集された太田教授の本書から、読者は貴重な教示をうけるに違いない。筆者も本書によって未知の資料に接する機会が得られた。小論をまとめるに際して、参考文献として利用させていただいたことをお断りしておく。

二

さて、家永豊吉の簡単なプロフィールを掲げよう。

家永は一八六二（文久二）年八月に福岡県柳川に藩士辻維岳（いがく）の子として生まれた。そして、幼時に柳川藩主立花鑑寛の藩士家永達之助に預けられ辻姓を名乗った。長じて熊本洋学校ならびに同志社英学校で学ぶ。熊本洋学校時代にジェーンズより受洗し、花岡山の「奉教趣意書」の宣誓署名者に加わった。その後洋学校の廃校にともない、卒業生と在校生一七名は一八七六（明治九）年九月、ジェーンズの紹介で同志社英学校に入学した。世にいう熊本バンドの輸血である。同志社では新島襄やラーネッドらの薫陶をうけるが、七九年、大久保真次郎と一緒に退学、自費留学で米国オベリン大学に留学する。オベリン卒業後さらにジョンズ・ホプキンス大学大学院に進み、PhDを得て帰国（一八九〇）、東京専門学校政治科講師となる。そして、一八九三（明

治二六）年から一九〇〇（明治三三）年まで慶應義塾大学文学部教授として原書を用いて欧米の歴史を講じている。なおこの時期、同じ慶應の文学部の教員としては、他に一時同志社の講師歴がある坂田丈平（漢文学）や中島力造（心理学）といった同志社関係者の顔ぶれもみられる。家永はまた兼任で東京高等商業学校教授もつとめた。慶應の文学部はその後学生が減り、明治三三年度で一たん閉鎖し明治三七年に復活するが、復活後の教授名簿に家永、坂田らの名前はなく、同志社関係者としては、唯一、蔵原惟郭（哲学・倫理学担当、在任期間明治三七―四〇年）の名前がみえる（『慶應義塾百年史』別巻〈大学編〉一〇一ページ、昭和三七年刊）。

慶應在任中に家永は、外務省翻訳係として外務省に勤務、さらに、一八九九（明治三二）年台湾総督府製薬所に勤務、アヘン制度調査の仕事に就く。そして、台湾のアヘン問題に強い関心をもっていた民政局長後藤新平の依頼をうけて西アジアのアヘン調査活動にでかけ総日数二八九日、行程二万三千余マイルの長大な調査旅行を敢行、蘇峰のはからいで『西亜細亜旅行記』と題する報告記を民友社から刊行（一九〇〇年）した。このとき家永は、インド、ペルシア、トルコ、エジプト等のアヘン調査をおこなうと同時にイギリスやフランスらの帝国主義諸国の植民政策の実態に次第に関心を深めていったものと考えられる。

PhDを取得して帰国後一〇年、家永に一大転機が訪れる。すなわち、一九〇一年、アメリカ永住の意思で決行された再渡米がそれである。渡米した家永に与えられた天職ともいうべき仕事は何であったのか。それは、シカゴ大学の大学普及部、ユニバーシティ・エキステンションの講師としての採用であった。家永はシカゴ大学初代総長W・R・ハーパーの構想の下に生れた大学普及部の講師として、大学教育の民間への普及活動に情熱を注いだ。かれの大学教育普及運動に対する関心の芽生えは、はやくジョンズ・ホプキンス大学時代に遡る。すなわち、在学中、大きな学問的影響をうけたH・アダムズやR・イリーの両学者がユニバーシティ・エキステンション運動に関わりをもっており、イリーがおこなった地方巡回講演に講師として参加していること、そして、帰国後、『国家学会雑誌』等で英米の大学教育普及運動の実態を紹介している。まさに、現代の生涯教育、市民教育の意義をわが国に積極的に紹介した最初の日本人といえよう。しかも演説や執筆だけでなく、東京専門学校講師時代に地方への巡回学術講演会を実施したり、講義録を印刷して筆記に慣れない受講生の理解を助ける努力をしている。早稲田では、一九〇九（明治四二）年、校外教育部を新設して市民教育に乗り出したが、ユニバーシティ・エキステンション運動の先駆的位置を占める早稲田大学にあって、家永はまさに強力な推進者としての役割を演じたといえるのである。このような家永の実践活動の根底には、帝国大学令に定める「国家の須要（しゅよう）に応ずる学術技芸を教授」する国家主義的な傾向と異質の民衆の啓蒙を目的とした「開かれた大学」の理念に共鳴する平民主義的な教育観があったと考えられる。

三

一八九二（明治二五）年に開校したシ

カゴ大学の大学普及部は、数あるアメリカのユニバーシティ・エキステンション運動の中でも最も活発で成功した例といわれている。開設された講座数、参加人数、学会誌『大学普及界』の発行等いずれもめざましい業績をあげていた。また、このような講座学習科に加えて、通信教育科も設けられ正規の大学教育をうけることのできない人々に対して、広く高等教育修学の機会を与えた。家永がシカゴ大学に赴任したのは、講座学習科 Lecture-study Department が開かれて九年後の一九〇一年で、それから一九一一年に財政上の理由で廃止されるまで一一年間続いた。

シカゴ大学講師時代の家永豊吉（1900年代）
（シカゴ大学図書館所蔵）

一九〇一年から一一年といえば、日本は日清戦争から日露戦勝を経て韓国併合を実現、そして満州に対する権益をめぐってアメリカとの対立が次第に顕著になってゆく時代である。また、極東の後発資本主義国日本が、日清日露の両戦争で、清国と世界の列強の一つであるロシアを打ち破り、漸く世界の注目を集めるようになったころでもある。アメリカ大統領シオドア・ルーズベルトの斡旋でポーツマスで開かれた日露講和会議の前後に、家永は勢力的に米国各地で講座を開いている。講演でとりあげられたテーマは、日本の国民性と政治制度、東洋・極東の外交問題、東西文明の比較、日露戦争論等である。

筆者は未だ家永のシラバスや講演記録を直に見たことがないので、ここで詳細にその内容を紹介することができない。しかし、一八八七（明治二〇）年一月に

オベリン大学の雄弁大会で演説した「文明の二つの様式」Two Modes of Civilization が前記『家永豊吉と明治憲政史論』に収録されているので、当時、かれが抱いていた東西文明論の概要を知ることができる。

家永は東洋と西洋の二つの文明を比較して、東洋社会では「特定の支配的な原則が完全な優勢を誇」っていたことを強調し、「東洋社会の単純さと一様性」を指摘する。そして、それと対照的な西洋社会の多様性と複雑性に注目している。単一性と複雑性のコントラストは、政治支配の様式から社会構造、思想の発展、文学作品の特徴、科学や芸術、道徳倫理の基盤に至る広汎な領域において認識せられる。そして、文明発展の水準からいえば、多様性の原理に立つ西洋文明が優位に立つとしてつぎのように述べている。「結論として、文明が進歩するにつれ、社会組織および個人の考え方、科学研究の対象、文学、芸術が多様化する」と。このように、かれは歴史事実と推論によって、統合と多様化という文明の二つのモード（形態）を析出した。そして、あい対立する両文明の様式は、今後、産業や技術の高度の発展と専門化の進展、労働の分業の促進によって、弱者、障害者等「小さき者」の存在意義が高められ、地球上の不毛の土地が耕作可能の土地となり、やがてシベリアやチベットの未踏の地にも幹線道路が走り、絶滅した過去の文明は蘇生し、ニネヴェやバビロンなど古代都市の富は復活し、エチオピアの財宝、アラビアの香料、フェニキアの貿易も復活して全世界に通商交易が盛んになるとして、未来の文明発展を楽観的に捉えている。また、「無限の複雑さの中から無限の単純さが生まれ」、「政治組織と経済組織はお互いに吸収し合い、一体化し、最後には全世界が一つの憲法、一つの運命、一人の神によって結ばれた共同体にまとまる」と主張している。いささか単純明快な進歩史観であるが、一種の東西文明融合論に通ずる世界同胞意識、ユニバーサルな平和共存の考え方がみられる。以上、日露戦争当時の家永の歴史と文明観の一端を概観したが、次いで、シカゴ大学の大学普及部の廃止（一九一一年）前後のかれの足跡を簡単にフォローしてみよう。

家永が、優れた語学力をもち、稀にみる雄弁な英語演説家であったことは定評がある。かれの演説会場はいつも聴衆で一杯になり、明晰な論旨、豊富な語彙、ユーモアたっぷりの明快な英語で日本と東洋問題、ミカドの国（日本）の地理的条件と歴史を日米友好を促進する立場からアメリカ人にわかりやすく解説した。また、当時、日米両国の争点であった人種偏見や人種優位の問題を大胆にとりあげて論じている。講演場所もシカゴ市内だけでなく、広くアメリカ東部から中西部に及び、学校、劇場、教会、画廊など集会の規模も大小さまざまである。日本人排斥運動や条約改正問題、大逆事件死刑執行に対する抗議運動など数々の頭の痛い懸案をかかえていた外務省は、家永の演説家としての力量と情熱に注目し、外交政略上、一九〇九年ころから一四年にかけてかれの活動に多額の補助金を支給している。当時、外務大臣や駐米大使、政務局長といった高官ルートから資金を得ていた家永に、どの程度まで政府支配層の推し進める国策の協力者という自覚

があったかどうか不明であるが、かれが実行した巡回講演と日米交換教授として渡米した新渡戸稲造やエール大学の朝河貫一らの活動と共通する側面があったことは否定できないであろう。ちなみに、一九一一（明治四四）年一一月、「日本及び日本人とアメリカの関係」を主題とする会議がクラーク大学で開かれたとき、家永は、新渡戸、朝河、高峰譲吉（日本クラブ会長）らと一緒に討議に参加している。

一九一一年にシカゴ大学を離れた家永は、巡回講演とニューヨークに設立した東西新聞局（極東の政治経済問題の調査機関）がその後の活動の拠点となった。

一方、極東情勢に眼を転ずると、一九一一年一〇月に中国武昌で辛亥革命の烽火があがり、翌一二年に孫文が清朝を打倒して臨時大総統に就任した。以後、中国は新旧両勢力と結びついた革命勢力と反革命軍の長期の内戦が続くなか、西洋列強の帝国主義支配に抗議する民族独立運動が各地で蜂起する。このように混乱の度を深める中国と日本の外交関係に対する米国民の関心が高まる最中の一九一四年、第一次大戦がはじまるや日本がドイツに宣戦布告し、山東省に上陸、青島を陥落せしめて軍政を敷く。そこで、中国は山東省より日本軍の撤退を求めるが日本政府は応じないで、逆に中国政府に対華21ヶ条要求を突き付けた。アメリカは直ちにこれに反発して「不承認政策」を明示、一段と日米の摩擦が激しくなってきた。加えて、移民問題をめぐる両国の対立は抜差ならぬ状態に陥り、一九一三（大正二）年にはついに、カリフォルニア州議会で排日土地法案が可決された。このような緊迫した世界状勢の進展のなかで家永が講演でとりあげた問題は、時局を反映して、日本の第一次大戦参戦の理由、ヨーロッパ戦争と極東、日米関係とヨーロッパ戦争、日中関係、山東問題、日本とカリフォルニア問題といったトピックスが目立つ。日米関係が悪化するなか、講演活動を通じて日本の実状と立場を冷静に説き、かつアメリカ人の正義と公平、寛容の精神とヒューマニズムを信頼してやまない家永の民間外交家としての奮闘ぶりが浮彫にされてくる。

民間外交官としてのフィナーレを飾る仕事は、一九二二（大正一一）年のワシントン会議における働きであろう。加藤友三郎を全権とするワシントン会議代表団の一員に、日本大使館顧問格として加わった。そして、条約が締結され、任務から解放されたのを契機に第一線から引退、一九三六（昭和一一）年、ニューヨーク州の凍結したオニーダ湖上で不慮の死をとげるまで、著述と講演活動を中心とする静かな悠々自適の生活に入った。

現在では、「太平洋の懸橋」として家永が貢献した事実を知る人は少ない。かつて、新島の説得を聞き入れず同志社に不満を抱いて去った「放蕩息子」（新島襄あて家永書簡の中の言葉）の家永が、若き日に師から口伝えに伝授されたキリスト教的国際主義と人類愛、そして世界同胞主義の精神が、やがて、日米両国の友好の絆の確立に心を砕く機縁となった不思議な運命を思わざるを得ないのである。

ここにも、新島がまいた「一粒の麦」の豊かな実りがあった。